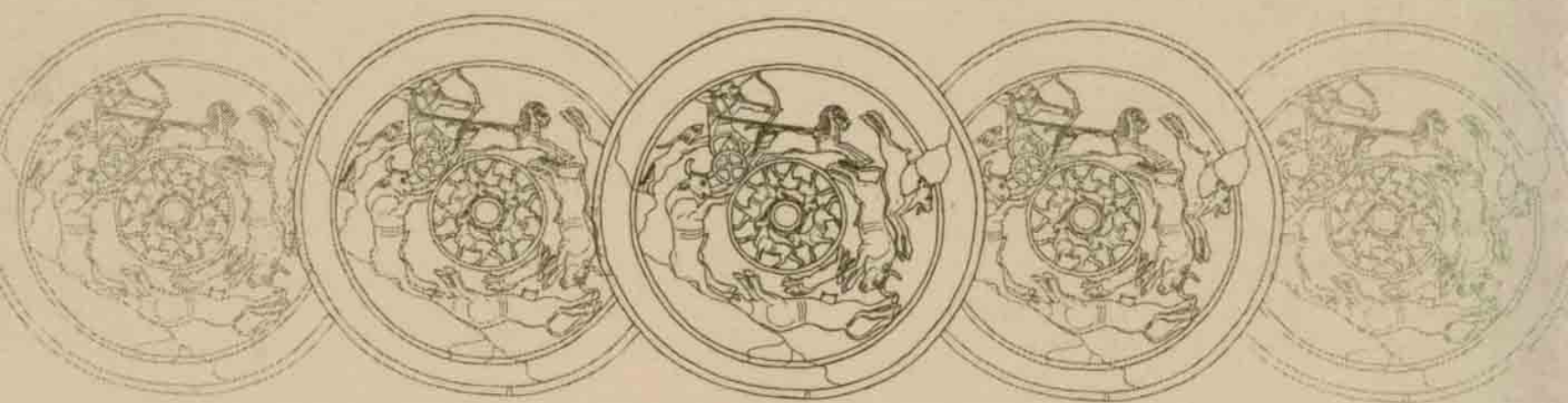


ウガル文学と古代世界

● C.H.ゴールドン著 ● 高橋正男訳



たか ほし まさ お
高 橋 正 男

1933年、福島県会津若松市に生まれる。
1958年、中央大学経済学部卒業。
1961年、中央大学大学院修士課程文学研究科修了。
1964-65年、イスラエル・ヘブライ大学に留学。
1966年、中央大学大学院博士課程文学研究科修了。
現在 獨協大学教養部教授
主要編著書 『藤本正高著作集』全5巻（共編）
（藤本正高著作集刊行会）
『聖書の世界』第2巻（分担訳）（購
読社）
『世界の女性史』3（共著）（評論社）

C. H. ゴールドン
ウガリト文学と古代世界

1976年5月20日 初版発行

© 高橋正男 1976

訳 者 高 橋 正 男

発行所 日本基督教団出版局

〒160 東京都新宿区西早稲田2丁目3の18

振替 東京 8-145610 電話 (202) 0541 (代)

印刷 三秀舎 カバー印刷 伊坂美術印刷 製本 市村製本所

3016-110463-6100(日千販)

ウガリト文学と古代世界

C. H. ゴールドン著

高橋 正男訳

日本基督教団出版局

UGARIT AND MINOAN CRETE

**The Bearing of their Texts
on the Origins of Western Culture**

Cyrus Herzl Gordon
tr. by Masao Takahashi

Translated by Permission of
W.W. Norton & Company, Inc. New York

Copyright, 1966

The Board of Publications
The United Church of Christ in Japan
Tokyo, Japan

序

ウガリト文学は、元来古物研究の興味を起こさせると同時に、その重要性は、おもにウガリト文学が初期のギリシアならびにヘブライ文学の起源と本質との解明に光を投げかけていることに由来している。ウガリト語は、すでに旧約聖書の諸研究を新しい立場に据えている。初期ギリシア文学に与えたその影響は、今も広がっている。ウガリトや古代イスラエルに関して、またウガリトがホメーロスや聖書とどのように関連しているかということについて、数々の本が書かれた。しかし何か新しいこと、それもきわめて重大な本質にかかわる何かを、今や付け加えるべきである。すなわち、紀元前一五〇〇年以後のある時期まで、ギリシア、ウガリト、およびイスラエルのすべてが同じ文化圏に属し、しかもその文化圏においては、それら三者が変化し入り混じって形成されていたが、その中でもっとも重要な言語学的、文化的要素がフェニキア語であった。こういうことがミノア文字で書かれた諸碑文からますます動かし難くなっているということ

である。この事実は必然的に古代の歴史、ギリシアの起源、およびヘブライ語聖書に関する——要するに、われわれ自身の西洋文明の根源と性格とについての——われわれの考えに深い影響を及ぼすであろう。こういう理由で、ウガリト文学は斬新な意義をおび、われわれの視野を広げつつある。

本書の内容は原史料に基づいている。もちろん、十分確立されており他の出版物の中で利用されている信頼すべき証拠のすべてをそのまま再録することはできない。しかしわたくしは、通常の知識の範囲を出ているあらゆる点については、これを古代の一次史料から引用した。

われわれの扱う主題は、流動的な段階にあり、広範囲なそしてさまざまな解釈をもっているが、後者に関しては、ときどき注で述べられている。この解釈については、それゆえに、しばしば付随のテキストと同じくらい——ときには付随のテキスト以上に——重要である。

わたくしは、読者が、事実のみならず、事実を発見し、それらの事実を追究して、論理的な結論を引き出す冒険にわたくしとともに参加されんことを希望するしだいである。

一九六五年六月二二日

マサチューセッツ州ブルックリンにて サイラス・H・ゴールドン

注

- (1) ʾšm ʾšm A. S. Kapelrud, *The Ras Shamra Discoveries and the Old Testament*, Norman, Okla., 1963; C. F. Pfeiffer, *Ras Shamra and the Bible*, Grand Rapids, 1962.
- (2) C. H. Gordon, "Homer and the Bible," *Hebrew Union College Annual*, 26, 1955, pp. 43-108. ʾšm ʾšm *The Common Background of Greek and Hebrew Civilizations*, New York, 1965; H. Haag, *Homer, Ugarit und das Alte Testament (Biblische Beiträge NF 2)*, 1962.

日本語版刊行によせて

ウガリトから出土した粘土板文書群は、二〇世紀の今日に至るまでに発見されたものの中で、もっとも重要な文献史料である。これらは、旧約聖書の諸研究に革命をもたらし、それとともにヘブライ学の堅実な発展をうながしてきている。ウガリト・テキストが紀元前第二千年紀末葉のギリシアとレヴァントの英雄時代の間隙に架橋しているという事実は、オリエント学のみならずギリシア学^{クラシックス}に対して深い影響を及ぼしつつある。

このたび拙著 *Ugarit and Minoan Crete* の日本語訳が出版されることは、わたくしにとって、大きな喜びである。かつてわたくしのもとで学んだ柴山 栄牧師（日本基督教団調布教会）と津村俊夫博士（筑波大学）を通じて、わたくしは個人的に日本のオリエント学および聖書学に対して関心を抱いてきた。一九七四年五月には、わたくしは、三笠宮崇仁親王殿下のご親切なお招きにより、日本オリエント学会第一六回学術大会において、「古代オリエントに於けるウガリトの

重要性」と題して創立二〇周年記念講演をおこなう機会をえた。そして、わたくしの専攻分野に関連する日本の旧知、長老、および新進の多くの学徒たちにお会いするとともに、かれらの大学を訪ねることができた。

本訳書を通じて、わたくしは日本の学界との交流がますます深まることを願って止まない。最後に、訳書の労に対し、厚く御礼を申し上げたい。

一九七六年一月三日

サイラス・H・ゴールドン

凡 例

一 本訳書の記号は、原則として、以下の基準による。すなわち、傍点は原著のイタリック体を、「」は原著の、を、『』は原著のイタリック体の書名を（ただし原著は必ずしも統一されていない）、（ ）は原著の（ ）を示す。

一 第四章の詩歌^{しうか}の部分は、幾とおりの翻訳を試みたが、原著を尊重して、直訳とした。単語と単語との間の全角アキは、読者の便宜を考慮して、訳者が付したものである。原著で大文字ではじまっている部分（形容語等）、たとえば、Two Rivers（本訳書七八頁）、Kothar-and-Hasis（七八頁）等は鉤括弧に入れるべきであるが、括弧を省略した。「」は原著の、を、『』は原著の、を、「」は原テキストの欠損部分あるいは破損部分を、傍点の部分は原著のイタリック体の部分で原テキストの意味が不確かな箇所であって、著者のきわめて不確かな訳を、へへは原著で「」の中に入っている語を翻訳の都合で分割したことを、——は原著の——で翻訳不能な行を、テキスト中の——の線は書記たちによって書板の段落を画すために引かれた線を、（ ）内の言葉は著者によって補われた言葉を、余白

の数字は C. H. Gordon, *Ugaritic Textbook* (*Analecta Orientalia* 38), Rome, 1965. のテキスト番号および行を示す。

一 地名、人名、神名等の表記は、原則として慣用にしたがったが、必要と思われるものは原音に近く表記しようと努力した。訳者はこれで満足しているわけではない。今後さらに検討を重ねて、もっと正しい原音に近い発音を表記したいと考えている。Text および Texts は、原則として、テキストと訳出した。

目次

序	三
日本語版刊行によせて	七
凡例	九
第一章 ウガリトとその重要性	一七
第二章 ウガリト文学とグレコヘブライの類縁関係	三三
第三章 ミノア文明期のクレータ	五三
第四章 ウガリト詩歌	七五
第五章 ウガリトの散文テキスト	一四二
第六章 結論	一五三
訳者あとがき	一五九
索引	一八四
地図	二八五

板倉勝正先生に本訳書を献げる

装丁 示村 直行

ウガリト文学と古代世界